

奢おこりは民主主義の敵

今度の大分と長崎両市の市長選は世の強い注目を浴びた。終了したので、あえて一言。

長崎の場合。保守陣営は対立候補本島市長を暴力から守る警備費は浪費として、非難攻撃の重要作戦とした。言論の自由を暴力から守ることが民主主義の根幹。それは民主主義のイロハ。そのための費用を惜しむことは暴力の温存助長である。このイロハを踏みにじった奢りに、長崎市民は痛打で応こたえた。

当の本島氏は告示前に言っている。「防弾チョッキを買ったが、あなただけが着ちやいかん、あんたは死んでも仕方がないが、そばの人を死なせちやいかん、と妻に言われた」と、ご夫婦とも常に死の中にいるのである。

当選の言葉が実によい。「これからも市民と同じ目の高さで市政に当たる」。市民本位の追求、それが民主主義自体である。それを忘れた奢りを持つかぎり、保守も革新も市民を裏切る悪の集団にすぎない。

さて大分の場合。大分市長（革新）は退陣間際に反対候補を「幾度も変節」と非難した。当の木下氏が衆議院に落選、市長選に回り、保守党の協力を求めたことを指している。いったいそれがなぜ悪い。公人として決して許されない奢った誹謗である。市民はその木下氏を圧勝させてあなたに応えている。

しかし、木下さん、本当の勝利とは、本島市長の「市民と同じ目の高さ」の謙虚さと勇気を市政に貫くかどうかにかかっている。それは命を賭けることだ。そうでなければ、退陣する革新（？）市長の言は正しい。

（一九九一年四月二十七日）